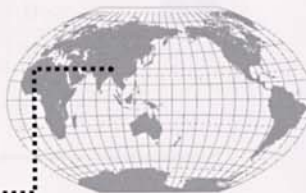


# 千載一遇のチャンス

栗田 靖之 (くりた やすゆき)  
国立民族学博物館名誉教授



## 皇太后のお口添え

民博の研究者となった一九七六年以来、フィールドとしているブータンでの資料収集は、私の課題であった。しかし当時もいまもブータンは、観光以外の目的で外国人が入国することに厳しい制限を設けており、収集を目的とした入国は、簡単に許可されるとは思えなかった。

しかし思わぬチャンスがめぐってきた。一九八一年、桑原武夫先生が中心となって、日本ブータン友好協会が発足し、親善旅行がおこなわれることになったのである。メンバーは、桑原武夫、西堀栄三郎、中尾佐助、佐々木高明、玉野井芳郎先生などのそうそうたる方々であった。私もこの旅行に参加した。この旅行団は、到着と同時にケサン・ワンチュック皇太后から、国賓の待遇を受けることになったのである。ある日皇太后主催のパーティに招かれた。その席で佐々木高明先生は、民博はブータンで資料の収集をおこないたいと述べた。皇太后は、「あなた方の希望を、政府関係者に伝えておきましょう」と返事をされた。長年の懸案であったブータンにおける収集の扉が開いた思いがした。

ことは慎重に運ばねばならない。当時アメリカ

カの博物館がブータンで買い付けをおこない、それを首都ティンブーからトラックで六時間ほどかかるインドとの国境の町ツォンオリンまで運んだところ、内務大臣がそのトラックをもう一度ティンブーに戻して、荷物を検査するということが起こった。私はそのような事態をさけるために、まず内務省に民具の収集を願いだした。

やがて、ブータンから返事が届いた。それは内務大臣からの短い手紙で、「ブータンでは骨董品の収集は許可されていないので、認めることはできない」という内容であった。私は皇太后からの口添えもあり、許可が下りるものと考えていたので、この返事はショックだった。内務大臣は、博物館が収集するのは、骨董品に違いないと考えたのであろう。

## 交渉につぐ交渉

私は、皇太后がわれわれの希望を政府関係者に伝えられたというこたえのために、どうしたことだろうと思ひ、ブータン側の事情を調べてみると、皇太后が口添えされたのは、通産省の大臣であることがわかった。今度は、民博は日用品の収集を希望しており、決して骨董品に興味があられるわけではないということを、くわしく



銅版に仏像を彫刻する職人



仏像 (標本番号H126700)



儀礼用ラッパ (標本番号H126566)



舞踏劇用仮面 (標本番号H180093)

バター作りの攪拌器・攪拌棒 (標本番号H115907等)

合いをおこなった。収集のやり方として、私は直接農民から購入することを申し出た。しかしブータン側は、農民からの直接の購入は認められなかった。もしそれを認めると、今後、農民が古い仏像や仏画などの文化財を、直接外国人に売りつけるようになるという心配からであった。いろいろと交渉を重ねた結果、次のような提案を受けた。まず民博が購入したい民具のリストを提出する。それを通商代表部が指名した人物がブータン国内で集める。そのなかから民博が必要とするものを購入してほしいというものがあった。私は、「それでは民具が使われている生活の背景を知ることができない。生活の場を調査させてほしい」と頼みこんだ。それならばブータン側で、そのような機会をつくりましょう、ということになった。

ブータンから、民具が集まったので来てほしい、という連絡があったのは、その年の一〇月であった。私は民博「友の会」主催の旅行に同行してブータンに行くことになっていた。その後ブツオリンに行つて、ブータン側が集めてくれた収集品を検品した。収集品は、希望した衣食住に関する生活用品を中心としたものであったが、



ケサン・ワンチュック皇太后と桑原武夫教授 (1981年)

説明した手紙を出した。今度は、通産大臣から、「民博の希望は、皇太后を通じて聞いています。カルカッタ(現コルカタ)のブータン通商代表部と連絡をとるよう」という返事が来た。通商代表部を訪ねたのは、一九八三年二月のことだった。そこで具体的な収集についての話し

## 生活の場で情報収集

それから一年がたった一九八四年一月、通商代表部から、収集した民具に関する情報を得るために、東端の町タシガンまで旅行してほしいという許可が出た。一月半にわたって、おんほろのジープに運転手と案内役との三人で東ブータンまで旅行したが、この旅は、私にとって忘れられない体験であった。この調査旅行で、私はブータンの民具が実際に使われているさまをつがさに観察することができたのである。

資料の収集は終わったが、それらの民具に関する情報は収集し続けなければならない。二〇〇〇年、JICAがおこなった博物館協力セミナーに、ブータン国立博物館の女性学芸員アキ・ヤンツォーさんが参加した。民博での研修のとき、私はアキさんにブータンの資料を見てもらった。収集した衣装のなかには、僧侶の衣装がある。チベット仏教の僧は、えんじ色のスカート状の法衣を身につけており、高僧のスカートの内側には刺繍がほどこしてあり、この文様は決して女性が見てほしくないという。アキさんは、生まれて初めて僧侶のスカートのなかの刺繍を見た話してくれた。「でもその文様のことは、決して誰にも話しません」という彼女の言葉が、今でも耳に残っている。